

〈近代本論第七回：キーワードと年表〉

1. 年表

- 1685 石田梅岩誕生（～1744）丹波国の農家に生まれる。八歳で京都の商家に丁稚奉公に出されるが、半年で帰郷。その後、二十二歳の時に再び京都に出て商家の手代となる。漢学、儒学に関心を持ち、独学で学び始める。
- 1716 徳川吉宗（1684～1751：将軍在位1716～1745）第八代将軍位に
- 1716～1735頃 享保の改革
- 1718 手島堵庵誕生（～1786）京都の豪商の子
- 1724頃 石田梅岩、心学に開悟
- 1729 石田梅岩、自宅に講席を設け、心学講話を始める（梅岩塾）。紹介状も受講料も不要で、すべての階級に開かれ、男女差も問わない、特異な私塾であった
- 1736頃 手島堵庵、梅岩の弟子となる
- 1738 手島堵庵、心学の奥義に開悟
- 1739 『都鄙問答』
- 1782 手島堵庵、京都に〈明倫社〉を開設、認可制度を整え、心学普及の中心地となる
- 1783 柴田鳩翁誕生（～1839）飛脚の元締めの子だが、家が没落して丁稚奉公に出た。書物が好きで独学で学んだことは梅岩に通じる履歴である。
- 1825 鳩翁、禅と心学の同一性に開悟、諸国を遍歴しつつ道話を始める
- 1835 『鳩翁道話』

2. 心学におけるアニミズム的習合の背景

- 中世的神仏習合
- 習合的密教の受容（空海 → 鎌倉仏教の一つの源泉としての真言宗）
- 縄文弥生的アニミズムの偏在 → 非・制度神道の基盤を形成（出雲神道等）
- 賢治のファンタジー世界におけるアニミズム的基軸 → 近代文化の習合

3. アニミズム的東洋 ⇔ 専制制度イデオロギー（儒教他）

- 老荘は制度周縁的、因循的（小役人としての老子、荘子）
- アニミズム的共同性は墨家が代表 → 鬼神崇拜、鬼神の見まもる善悪
- 共同体防衛の工人集団へ ⇔ 儒教的制度翼賛

- 始皇帝の専制的統一により、墨家は滅びた
- 伝統は地下水脈的に残存 → 魯迅の〈非攻〉(『故事新編』へ)
- 東洋の定位遺産を二分する隠れた二項対立

4. 日本文化の基底部にある習合の活力 → 心学にも如実に見られる
- アニミズム的習合を原点とする
 - アニミズムはすべての神々を受け入れる自然崇拜だった
(渡来神はやがて地場の神々へと転生する)
 - 日本上古のみならず、エジプト、ギリシア、インドの多神教世界にも共通する
 - 生命観、自然観の人類史的一元性が背景にある
 - 歴史的にも哲学的にも分析記述がなされていない、未知の、未開拓の分野
 - したがって日本文化の基底的習合性に対する理解もいまだに初発的
 - 今後の定位哲学、文化人類学、歴史学の大きな課題
 - 神仏習合も基底部はむしろアニミズム
⇔ 国学のピューリタニズム (本章第四節)
 - 和漢混淆の精神も習合文化の現象

5. 心学講話に見られる〈語り物〉の伝統
- 口語の精神とアニミズムの親和性 → 民衆文芸としての〈語り物〉の展開
 - 日本的文体の基軸を形成 (引用1)
 - 仏教説話との類縁性 (無住師の『沙石集』等)
 - 明治口語文の先駆
 - アーネスト・サトウは『鳩翁道話』で口語を学んだ
(『一外交官の見た明治維新』)

引用1

〈そなた衆は隙もなく、四角な字 (※漢字のこと) はよめぬによって、それでその通りじゃ (※説法をきくだけで十分) といふ事でござる。そなた衆もひまなときがあれば、聖賢のおしへは聞がようござる。身共が講釈でもせば、精出して聞にござれ。世間の講釈は聞にゆかしやることは無用でござる (!)。それは世間のがわるいといふてとめるではござらぬ。多くはむつかしかつたり、文字言句のせんさくばかりであつたりして、そなた衆の身だめになる事はあまりござるまい。すりや、いそがしい身のひまつぶしでござるワイ。こちらの講釈は身どもが文盲なによつて文盲にとくゆへ、そなた衆のために聞よいではござらぬか。〉 (手島堵庵『座談随筆』、125p)

6. 心学的習合 = 神、仏、儒の融合 (引用2)
- 習合的自然神信仰は、制度神道以前へと遡行する
 - 仏教の要素は禅を通じて摂取される

- 儒学の摂取は〈士大夫の修身〉を超越して、〈心の一元性〉を説く（梅岩）
- 心学における儒学の民衆化は、農民の子で、〈近江聖人〉とよばれた中江藤樹（1608～48）の事蹟と重なる部分がある

引用2

〈聖人の道も、チンプンカンプンでは、女中や子ども衆の耳に通ぜぬ。心学道話は、識者のためにまふけました事ではござりませぬ。ただ家業におはれて、隙のない御百姓や町人衆へ、聖人の道ある事をおしらせ申たいと、先師（※心学の開祖、石田梅岩のこと）の志でござりまするゆゑ、随分詞をひらたうして、譬をとり、あるひはおとし話をいたして、理に近い事は、神道でも仏道でも、何でもかでも、取こんでおはなし申す。かならず軽口ばなしのやうなど、御笑ひ下されな。これは本意ではござらねども、ただ通じ安いやうに申すのでござります。〉（柴田鳩翁『鳩翁道話』、235 p f）

7. 心学的定位 = アニミズム的生活定位

- 普遍的に日本的であり、また固有に江戸的である
- 社会分業のエートスを〈職分〉としてとらえたことが、身分制度を超越しつつ、なお身分制度への適応を可能とした（町人としての本分のまっとう＝町人の〈ころ〉の完成）
- したがって明治の〈四民平等〉の世の中では、〈旧弊〉のイメージで捉えられることが普通だった（二葉亭の例 引用3）
- しかしその〈四民平等〉の階級平準性を用意したものこそ、心学の社会分業論だったとも言える
- 制度的人為と民衆的主体性の弁証法（→二葉亭はその感覚を失っている）
- 制度的人為（士農工商）が消えれば、心学の歴史的課題も解決済みとなり、ひとまず社会エートスの表舞台から消える（明治の現実）
- しかし心学的習合は、より大きなアニミズム的習合の流れの、その一場面だった。
- その流れはそれ以前にも、それ以降にも存在した

引用3

〈今食ふ米が無くて、ひもじい腹を抱えて考え込む私達だ。そんな伊勢屋の隠居が心学に凝り固まったやうな、そんな暢気な事を言って生きちやゐられん！〉（二葉亭四迷『平凡』〈四十〉、321 p）

8. 心中情念と江戸的抑圧

- 〈語り物〉におけるアニミズム的習合
- 七五調の系譜 → 今様、『梁塵秘抄』を経て義太夫へ
- 人形浄瑠璃の〈道行〉による定型の完成（引用4）
- 心中道行は江戸庶民の中核的情念であった
- 江戸的抑圧と不可分の関係にある
- 身分制的分断からの超越的脱出（あいたいじに相対死）
- プロットの基軸はつねに〈金のしがらみ〉
- 流通自体の抑圧的要因の増大（高利資本の定向的拡充等）
- 明治期以降も連続（一葉の『にぎりえ』、漱石の『それから』等）
- この連続性は抑圧の連続を意味している

引用4

〈此の世のなごり。夜もなごり。死しにには行く身をたとふれば あだしが原の道の霜。一足づつに消えて行く。夢の夢こそ あはれなれ。あれ数ふれば暁の。七つの時がむつ六鳴りて残るは一つが今生の。鐘のひびきの聞きをさめ。じやくめついらく寂滅じやくめついらく為楽と ひびくなり。〉（近松門左衛門『心中天網島』）

9. 義太夫の明治的残存

- 文体からの〈相対〉情念（双数的孤立）の自然発生
= 情念型の力学、水中花的自己塑性
- 文体の基底部にあるアニミズム的習合力も（形式化しつつ）残存

① 二葉亭四迷の場合（引用5）

- プロットにおける全体性の阻害 → 近代的心理描写文体の欠如
- 全体から分断された登場人物の双数的、相対的孤立
- 義太夫文体への本能的回帰
- 明治的定位において、アトム化の急速な進行は、生活を強度に分断する
- 前近代的セーフティネットも消滅の過程にある
- 二葉亭の登場人物（と二葉亭自身）の「世間」の狭さ
- 啄木の『ローマ字日記』の世界へ連続

② 樋口一葉の例

- 一葉は〈語り物〉文化を日常風景として吸収していた
- 吉原の浄瑠璃芸人（引用6）
- 人情話（江戸と明治開化の混淆） → 義太夫調の本能的選択（引用7）

引用5

「お勢さん」

但し震声で。

「ハイ」

但し小声で。

「お勢さん、貴嬢もあんまりだ、余り……残酷だ、私がこれ……これ程までに……」

トいいさして文三は顔に手を宛てて黙ってしまう。意を注めて能く見れば、壁に写った影法師が、慄然とばかり震えている。今一言……今一言の言葉の関を（※ここから義太夫語り）、躑えれば先は妹背山、蘆垣の間近き人を恋い初めてより、昼は終日 夜は終夜、唯その人の面影而已常に眼前にちらついて……）（二葉亭四迷『浮雲』第一篇第三回、30 p）

引用6

〈毎夜、廊に心中ものなど三味線に合せてよみうりする女あり。歳は三十の上いくつ成るべきにや。……小意気にしやんとして、其むかしは何成りけん……〉（樋口一葉日記『塵の中』明治二十六年八月三日条）

引用7

〈当世様の若大将（※七五調の開始）、粹は身をくふ合ぼれの中おもしろく（※定型に気づいて字余りで緩和）、互いにのぼる二階三階、せきはとどめぬ帳場の為にも、大尽客とて下にもおかぬもてなしを、猶やぬし様御顔よかれと、みえにはそろひの惣はつぴ（※七五調再開）、女子にちらす紙花の、哀れや女もつまりに成りて双手にあまりしこがねの指輪、一つは内處、二つはそつと、三つ四つと売りつくせば、やがては客のひびきに成りて、岡やき半分なぶらるる、……〉（同上、『水の上日記』、明治二十七年七月二十日条）

10. 封建的分断の疎外は心中情念、心学的定位に共通する抑圧の前提である

- 心中情念は〈しがらみの俗世〉を相対死で超越しようとする
- 心学は〈職分〉のエートスに徹することで、身分制を社会的分業として再定義する
- 主体的疎外の回復

11. 石田梅岩の履歴に投影された主体性、階級縦断性、習合性

- 農民の子として、丁稚奉公により最初の都市体験（京都）
- 青年期から再び商家の手代 → 独学で漢学、儒学を学ぶ
- 儒学の民衆化は中江藤樹の時点で始まっていたが、梅岩はそれに〈心の同一性〉という定位原理を与えた
- 〈心の同一性〉の直感を彼に与えたのは、儒学ではなく禅学だった

(同様の禅儒の習合は王陽明の場合にも見られる)

- 〈開悟〉体験の画期
- 儒教的位階の平準化原理となる(儒学の内的革命)(引用8)
- 〈見性体験〉(人間の本性を悟る) → 孝心の覚醒(引用9)
= 儒仏の融合

引用8

〈元来世間に書を読而已を学問と思ひ、書の心を知らざるゆへに汝が如く(※今梅岩に質問した人間の如く)見誤ること多し。総て経書は聖人の心なり。聖人の心も我心も心は古今一なり。其心を知て、書を見る時は、書の意味は「掌」を見るが如し。〉(石田梅岩『都鄙問答』、〈孝の道を問うの段〉、20p)

引用9

〈性を知りたしと修行する者は得ざる所を苦しみ、是はいかにこれは如何にと、日夜朝暮に困むうちに忽然として開たる、其時の嬉さを喩えていはば、死にたる親の蘇生、再び来り玉ふとも其楽にも劣るまじ。〉(同上、〈性理問答の段〉、78p)

12. 〈天職〉としての商い

- 身分制と〈天職〉の宥和
- 士農工商への主体的適応としての心学的定位
- 儒教は農本主義を基本とし、商業を蔑視してきた
- 梅岩は〈職分〉の社会性を指摘する
- それによりこの蔑視を転倒した(儒学内革命)
- 売買渡世がそのまま〈道〉であるという主張(引用10)
- 元禄的バブルのニヒリズムをも超克
- 商利の肯定 → 武士の〈常禄〉との等置(引用11)

引用10

〈商人の其始を云はば、古は、其餘りあるものを以てその不足ものに易て、互に通用するを以て本とすとかや。商人は勘定委しくして、今日の渡世を致す者なれば、一錢輕しと云ふべきに非ず。是を重て富をなすは商人の道なり。富の主は天下の人々なり。主の心も我が心と引きゆへに(※再び心の同一性による根拠づけ)我一錢を惜む心を推て、売物に念を入れ少しも僿相にせずして売渡さば、買人の心も初は金銀惜しと思へども、代物の能を以て、その惜む心自ら止むべし。惜む心を止善に化するの外あらんや。且天下の財宝を通用して、萬民の心をやすむるなれば、天地四時流行し、萬物育はると同く相合ん。如此して富山の如くに至るとも、欲心とはいふべからず。〉(同上、〈商人の道を問の段〉、26p)

引用 1 1

〈売利を得るは商人の道なり。元銀に売る（※仕入れの値段のまま売る）を道といふことを聞ず。売利を欲と云て道にあらずといはば先孔子の子貢を何とて御弟子にはなされ候や（※子貢は商才に長け、原始儒教団を経済面で支えたと伝えられる。ただし孔子の評価は低かった）。子貢は孔子の道を以て売買の上に用ひられたり。子貢も売買の利無くは富ること有るべからず。商人の買利は士の禄に同じ。買利なくは士の禄無して事^{つかふる}が如し。〉
(同上、〈或学者、商人の学問を譏^{そし}るの段〉、57p)

1 3. 安藤昌益の農本的原始共産主義との比較

- 安藤昌益（1703～62）の四民平等論は、徹底した農本主義を基本として主張されている
- 農本主義をイデオロギーの中核とする幕藩体制と適合している
- さらに彼の場合は、全人民が耕作者となるという徹底性を示している
- 江戸期の社会的現実、流通と貨幣経済の全面的浸透に規定されていた
- 昌益の立論はこの現実を無視した観念論にすぎない
- したがって同時代的には何の反響も影響も生まずに終わった
- ノーマンが高く評価したことで、リバイバルが起きた
- しかしこの評価自体、ノーマンの基本である歴史の下部構造進化への目配りが不思議に欠如している
- 対して梅岩の〈商利＝常禄〉論は、時代の現実根ざした、真に革命的な主張である（すくなくとも農本的イデオロギーでありつづけた儒学内部ではそうである）
- 心学は封建的身分制への再適合のエートスを〈四民平等の職分〉として可能にした
- この適合が思想史においては〈反動的順応〉と等置され、低い評価の原因となった（丸山真男等）
- しかしこの評価自体、「近代的偏見」の産物であり、心学が置かれていた酷薄な社会状況を正しく認識したものとは言えない

1 4. 心学的定位における、〈宥和〉の哲学

- 儒学は元来士分の寡占する制度イデオロギーだった
- それを〈庶民の道〉へと拡大し、〈聖人の道〉を一般化したことの意味
- 士分儒者からの反撃にその革命性は透けて見える（引用 1 2）
- 梅岩は乞食、被差別民にも〈道〉は存在すると反論する
- その場合の〈道〉は、社会生活を可能にする共同体のルール＝社会倫理
- 四民の協業 → 社会生活の基盤（引用 1 3）
- 社会分業的平等論 = 〈職分〉の平等 → 天地の〈禄〉としての生活

- マクロコスモスとミクロコスモスの照応 (引用 1 4)
- ルネサンスの人文主義にも同じ発想が見られる (占星術と習合することもあった → ワールブルク)
- 心の同一性 → 神仏儒の同一性 (引用 1 5)

引用 1 2

〈曰 (※質問者が言う) 商人などは毎々に、詐^{いつわり}を以て利を得ることを所作とす。然らば学問などは決して成るまじきことなるに、汝が方へは多く商売人相見え候由、汝は此にては此に合せ、彼にては彼に合せて教ゆるなれば、孔子の玉ふ郷原 (※偽物の里仁) にて、徳の賊とは汝がことなり (『孟子』盡心下篇 ※原注による)。学者にあらずして流を同ふし、汚世にかなふて世に媚^{こび}へつらひ、人を誣^{くらま}せ己が心を欺く小人なり。門人は是を知らず。汝も学者の中と思はるるは恥にあらずや

答「君子は其の知らざる所に於いて、けだし闕^かくが如くす」 (『論語』子路篇) と孔子もの玉ふ。凡て知らざることは闕き置べきことなり (※そのままにしておくべきだ)。此理を知らずして云ちらすは野卑^{いやしき}ことにあらずや。扱^{さてまた}汝の云へる所は、世の人も疑ふ所なり。惣^{すべ}ていへば道は一なり然れども士農工商ともに、各^{おのおの}行ふ道あり。商人は云ふに及ばず、四民の外乞食までに道あり。) (同上、5 5 p f)

引用 1 3

〈売買ならずは買人は事を欠^{かき}、売人は売れまじ。左様になりゆかば商人は渡世なくなり (※生活の手段を失って) 農工とならん。商人皆農工とならば財宝^{かよは}を通^{たすけ}す者なくして、萬民の難義とならん。士農工商は天下の治る相^{たすけ}となる。四民かけては助け無かるべし。……商人の売買するは天下の相^{たすけ}なり。細工人に作料を給るは工の禄なり。農人に作間 (※収穫の一部) を下さるることは是も士の禄と同じ。天下萬民産業なくして何を以て立つべきや。商人の買利も天下御免の禄なり。夫^{それ}を汝^{ひとり}独^{ひとり}売買の利ばかりを欲心にて道心なしと云ひ、商人を悪^{にく}んで断絶せんとす。何^{なにを}以て商人計りを賤^{いやし}め嫌ふことぞや。汝今にても売買の利は渡さずと云ひて利を引^{ひき}て渡さば (※原価のみを支払えば)、天下の法破りとなるべし。) (同条、6 1 p)

引用 1 4

〈聖人の道は天地^{のみ}而已。天地は見へたる通^{とほり}に清と濁と有て天は清^{すめ}り地は濁れり。清る天も濁れる地も、何方^{いづかた}を見ればとて、物を生じ育ふべきとも不見^{みへず}。無心なれども、萬物生生して古今違はず。……天地を人の上にていはば、心は虚にして天なり形はふさがって地なり。呼吸は陰陽なり。……是を以て見よ。人は全体一個の小天地なり。) (同上、7 6 p f)

引用 15

〈神儒仏ともに悟る心は一なり。何れの法にて得るとも、皆我心を得るなり。〉(同上、
〈性理問答の段〉、92 p)

15. 鈴木正三^{しゅうさん} (1579~1655) の職分論との比較

- 島原の乱後の混乱 → 正三は職分のエートスを説いた(『^{ろあんきょう}驢鞍橋』1660年』)
- 〈世法則仏法〉、〈職分仏行〉等の非常にユニークな主張
- しかしその影響範囲は限定されていた
- 梅岩の心学は〈プロト等族〉としての町民層全体に浸透した
- 元禄的バブルのニヒリズムを超克したことが大きな功績である
- 寒村の一少年の実存遍歴 → 開悟の階層性、普遍性
- 近世的〈宥和〉の哲学の誕生(ヘーゲルとの比較)

16. 『塩原多助』における心学の残響

- 明治的立身出世との習合
- 〈文体〉的系譜も心学と重なる
- 〈寄席講談的語り物〉 → 言文一致の原動力の一つに
- 〈天地の奉公〉としての勤労エートス

17. 心学の内面性は、普遍的位相における〈アトムの内面性〉に照応する

- 宗教改革を経た内面性との比較(ヨーロッパ的内面性)
- 梅岩の場合、内面性のベクトルは世界内的(アニミズム的)で、超越的(キリスト教的)ではない
- したがって両者は一つの普遍の地域的顕現形式であると考えられる(淵源と根源の重合と分岐)
- 機械道具型のメガ・システム上に分散し、孤立したアトムとしての近代人
- そこで分業によるマシンの正常な運転を観念することの意味
- その観念は内面において展開され、内面の一元性を根拠として、社会化される
- 近代のエートスと社会分業の本質連関
- 近代の内面性と〈職分〉(社会的分業の各パーツ)との本質連関
- 両者ともに、心学の内的契機を形成している
- 心学的職分論はジョブホルダーのエートスへの継承された(漱石の『門』以降のテーマ)

(第六回キーワード終わり)